よりあってつむぐ発達をゆたかに

乳幼児期から終末期まで

第7回　安心できる人と一緒に生活し、自分で決める～聴いてもらう権利

川地亜弥子
神戸大学

こんにちは。京都発達研究会の連載もいよいよ後半に入りました！　私はこの会の発達診断事例検討会の世話人をしています。平和と非暴力をねがい、人間の尊厳を守る発達保障について、事例に即しながら実践的・科学的に探究することをめざしています。

毎回1人の子どもに絞って、1日かけて事例検討をします。発達検査の場面だけでなく、日常生活（お家や保育園、幼稚園、学校など）の様子もできるだけ教えてもらって、今後どのような保育・教育・療育が重要かを考えます。

後日、それを支援や指導に関わる人に伝え、その後の変化も次回以降に教えてもらいます。事例検討会からお伝えした遊びや対応について、その子がとても喜んでいる、支援する人の子どもの見方がやわらかくなった、という話を聴くのが何よりの喜びです。

この会の源流は、故・田中杉恵先生に講師をお願いして2001年度に開催した発達診断自主ゼミにあり、そこから数えますと今年で19年目。来年いよいよ「成人」です。

さて、今月のテーマは学童期の指導と発達です。8、9月号のサキさんについて少しまとめた後に、子どものことば、作文を通じて考えていきます。

みんなと同じにやりたいのに

8、9月号では、宿題が思うようにできず、「9歳のお誕生日いらん…」「どうやったらみんなと同じになれるの…？」と涙したサキさんが登場します。担任の先生も保護者の小西さんも、サキさんにあった宿題をと何度も話し合いましたが、サキさんは「みんなとちがう宿題はいや」という思いをもっていました。ここで小西さんは「どういう形なら折り合いがつけていけるのか先生とサキと私と3人で決めました。（サキさんが：川地補）『自分で決める』ということもとても大事でした」とまとめています。

ともすれば、学校は「ルールを守る」「みんな同じようにする」ことを求めがちです。保育園でも同じ課題にとりくむことはありますが、自分がどのように表現するか、どのような役割で参加するかということにはかなりの自由度があり、○か×か、同じようにできているかどうかということよりも、その子なりの表現、参加が大事にされています。

小学校も、そうしたことを大事にしていないわけではないのですが、「正しい文字」「正しい計算」…と、方法でも結果でも○か×かがはっきりする課題が多くあります。そのことは、サキさんの大きな負担になったのではないでしょうか。友だちがどのように課題にとりくんでいるかをしっかりとらえていく時期だからこそ、「同じ課題」が「自分はできない」ということは大変なショックだったのではないかと思います。

しかし、そのなかで、サキさんは「自分で決める」ことを尊重されました。自分の思い通りにならないことがあったときに、その悲しさや苦しさに心を寄せ、最終的にどうしたいのかを尊重されることは、人生のどの場面にあっても重要なことです。

共感してくれる他者がいる

この後サキさんは、特別支援学級でわかる実感がある授業を受け、自分の障害について知り、自分の好きなビオトープで継続的に学ぶようになります。保護者の小西さんもサキさんの感じ方を「キャッチできる」ようになりました。ビオトープで出会う専門家が、サキさんの生態観察の鋭さにびっくりすることもありました。自分にとっておもしろいことを一緒におもしろいと感じたり、すごいねと言ってくれたりする人がいること。こうしたことの一つひとつが、サキさんには大事だったのではないかと思います。

別府哲さんは、人が相手の心を理解する二つの方法について考察しています。一つは、なんとなく相手の気持ちを理解する直観的心理化。もう一つは言語で理由を述べることができる命題的心理化。自閉スペクトラム症の子どもたちは、直観的心理化に弱さを抱えたまま、命題的心理化のみを獲得するのではないか、と述べています。しかし、直観的心理化がないのではなく、とてもユニークなものであるために、障害のない人を基準に考えると「ない」と誤解されてきたのではないか、と指摘しています。[1] このため、他の人と同じように直観的に「おもしろい！」と思う経験がもちにくく、また逆に他の人から直観的に「おもしろい！」と共感してもらう経験も少なくなります。

おそらく、小西さんやビオトープの専門家は、とてもユニークなサキさんの思いに直観的に共感したのではないでしょうか。自分がおもしろいと思うものをほかの人もおもしろく思っていること。それは、サキさんにとって重要な意味があったでしょう。

否定的な感情を出す

さて、ここからは作文や日記をもとに、子